

平成29年1月6日(金)

老球の細道295号

相双地区クリニック雑感

会津バスケットボール協会 室井 富仁

私にとって相馬、原町地区は特別な場所である。昭和53年に新採用で赴任し、教員として初めてバスケットボールの指導をスタートした地だからある。今思い出せば恥ずかしいかぎりの若気の至りの連続であったが、自由に満ちた学校の雰囲気の中で、可能性に満ちた情熱ある教え子たちとの7年間はすばらしい財産と言っても過言ではない。

退職してから2年が過ぎ、県内5地区で唯一クリニック未実施の地区が相双地区であった。原町高校時代の教え子たちの子どもたくさんバスケットボールに携わっている中で、この地でクリニックを実施するのは永年の夢であった。その夢が会津高校時代の教え子桑田先生(相馬東高校)達相双地区の若手指導者によって昨年末実現させてもらったことは大感激であった。この地区にはもう一度福島県をリードする地区になってほしい。

昨年12月23日(金)、24日(土)とクリスマスイベントで気忙しい中、23日は相馬東高校で80名、24日は原町第一中学校で80名、ミニ、中学、高校とのべ160名の選手たちが参加してくれた。指導者も二日間で30名以上は集まったのだろうか。

二日間ともだいたい同じ内容で進めたのであるが、初日の相馬地区で参加した中学生、高校生数名が原町地区のクリニックにもリピーターで参加してくれた。これには感動した。会津地区のクリニックにおいても、大会中でもクリニックに休まずに参加する子どもたちがいるのと同じくらい感動する。このような選手たちは例外なく素直で能力が高い。そしてクリニックの度に向上している。

ダイヤモンドの原石がたくさんいた。どこの地区においてもそうであるが、チームとしてはあまり勝利には恵まれず目立たないが、個人的にはすばらしい可能性を持った子どもたちが必ずいる。このような子どもたちは適切な場やチームメイトに恵まれると途端に大ブレイクする。そのような原石を見つけるのもクリニックの楽しみである。ダイヤモンドの原石は日常関わる指導者の適切なコーチングによって磨かれる。

今回のクリニックはワンハンドシュートやドリブルなどのファンダメンタルが中心のクリニックだったので、ミニから高校までのカテゴリーが一堂に会しても何ら不自由なく指導できると思っていた。ところが、原町地区会場でミニの子どもたちから、私の話している言葉の意味がわからないというメッセージが届いた。スキルの名前、ポイントなどはほとんど英語のキーワードで説明しているので小学生には難しかったかもしれない。バスケットボールというスポーツはすべて英語で成り立っている。バスケットボールによって英語も勉強できる。しかし、「わからない!」という声に謙虚に耳を傾け反省すべし。

教え子や昔のバスケットボール仲間たちがたくさん集まってくれた。そのような中で自らデモンストレーションすることで「室井富仁未だ老いず!」をアピールしたかったが、見せてはいけないものを見せてしまったことが悔やまれる。その流れでインフルエンザへ。

二日間のクリニックを終えて、昔よく通った国道119号線を通って帰ったが、沿線沿いの飯館村の民家はどこもかしこも家の灯りが消え、田んぼには除染の土がどこもかしこも山のように積み上げられた風景が川俣まで続いていた。飯館にあった大好きな名物コーヒー店は今は昔、相双地区はまだまだ東日本大震災は終わっていなかった。